

早稲田大学 スポーツ科学部

小論文 解答例

筆者は以下のように述べている。自分は、学校時代に体育が苦手だったせいで、現在にいたっても、スポーツをしたいという欲求がない。また、スポーツを見る側に立ってみても、選手に感情移入ができず、退屈感しか感じない。しかし、音楽や映画では「同化」の感情を味わうことができる。スポーツはわかりやすく、誰でもが参加できるかもしれないという「近い」芸術である。それなのに、なぜ、芸術が自分のなかに呼びおこすあこがれに似たあの感情を生みだすことができないのか。これから考えていきたい。

私は、筆者のスポーツ嫌いの姿勢には賛成できない。私は筆者にスポーツの素晴らしさ、魅力を伝えたいと思う。

筆者はスポーツが苦手で、かつての記憶や恐怖心にしばられ、全く楽しめないと書いている。だが、そのことが、筆者をしてスポーツに対し、客観的な視点をもたせている。選手、観客が共に味わう「日常生活では味わえない緊張感」や「何が起こるかわからないドラマ性」、さらには観客と選手の「一体化」といったものを筆者は十分に理解している。そして、音楽や映画では「同化」の感情を味わうことができるのに、「近い」芸術であるスポーツに自分はなぜ退屈してしまうのかと、少々いらいらしている。

だが、筆者は学校時代の体育の記憶にとらわれすぎて、スポーツに対して構え過ぎてはいないだろうか。かつての苦手意識を払拭するのは、なかなか困難であろう。しかし、最近のスポーツは実に多彩で、レベルも非常に高い。世界中から一流選手が集まり、ハイレベルの争いを繰り広げ、最後はさわやかな握手で終わる。この、手に汗にぎる勝敗の行方と、互いをたたえ合う結末の感動は、スポーツでしか味わえない。スポーツは音楽や映画と同じく国境を持たず、観客同士も人種を超えて一体感でつながれる、わかりやすく「近い」芸術なのである。

音楽に鳥肌の立つような感動を覚えることのできる、感受性の豊かな筆者なら、必ずスポーツにおいても感動を味わえるはずである。まずは、過去にとらわれずに無心になって、最低限のルールを学び、スポーツ観戦に臨むことを筆者に勧めたい。

(約 900 字)